氏　名（本籍）	住　本　　純（大阪府）
学 位 の 種 類	博士（教育学）
学 位 記 番 号	甲第98号
学位授与年月日	令和3年3月15日
学位授与の要件	文部科学省令学位規則第４条第1項該当
学 位 論 文 題 目	大学の体育科長期研修における現職教員の成長に関する実証的研究
審　査　員	主査　日本体育大学　教授　近　藤　智　靖
	副査　日本体育大学　教授　今　関　豊　一
	副査　日本体育大学　教授　池　野　範　男

《論文審査結果の要旨》

本研究は，大学における体育科長期研修に参加した教員の参加契機や動機，また，研修経験と成長プロセスとの関連を実証的に検討するため，以下の3つの目的を設定した．

1　研修に対する参加契機や動機を明らかにすること．

2　研修での経験や学びとその成長プロセスを明らかにすること．

3　研修に対する参加契機や動機と研修経験や学びおよび成長プロセスとの関連を検討すること．

論文の概要は，以下の通りであった．

序　章

近年，学び続ける教員の必要性が指摘されており，教員研修を通じて絶え間ない成長が求められている．その中で，大学における長期研修の成果が報告されているものの，学びのプロセスについては十分に検討されていない．また，研修によって得られる経験や学びと成長プロセスには，教員の研修ニーズ等の影響が想定されるものの，その点に着目した研究は見当たらない，といった課題を指摘した．こうした課題意識から，上記の3つの研究目的を設定するに至った．また，学位論文全体に関わる研究方法を導出するため，Randolphの方法を援用して，現職教員の成長に関する研究動向を分析整理した．その結果，多くの先行研究では，「学習や経験」，「研修」，「省察」といった教員の学習プロセスをリサーチクエスチョンとしていた．さらに，質的研究方法が多く用いられていた，ということを明らかにした．

第1章　現職教員の長期研修に対する参加契機や動機

第1章では，研修に対する参加契機や動機を明らかにするために11名の教員を対象としたインタビューを行い，継続的比較法を用いて分析した．分析の結果，研修に対する多様なニーズや参加意欲の高低を明らかにした．また，参加意欲の高低や参加契機等が能動的か受動的かによって振り分けた結果，研修生はaタイプ（受動的・消極的），bタイプ（受動的・積極的），dタイプ（能動的・積極的）の3つのタイプに集約された．

第2章　現職教員の大学における体育科長期研修での成長プロセス

第2章では，研修での経験や学びと成長プロセスについて検討した．対象は第1章でインタビューをした10名であり，M-GTAを用いて分析した．その結果，多様な経験や学びが浮き彫りとなり，研修生の成長プロセスが明らかなった．また，成長プロセスの基礎的条件として，「授業を追究できるコミュニティ」や「環境的条件」の重要性が明らかになった．さらには，成長プロセスを経ていくことで，研修生の体育授業改善に向けた「コミットメント」が高まることを示唆した．

第3章　長期研修への参加契機や動機と研修経験や学びおよび成長プロセスとの関連

第3章では，研修生のタイプと長期研修での成長プロセスとの関連性を検討した．その結果，aタイプの研修生は複線的な成長プロセスを辿り，一方で，bタイプとdタイプの研修生は直線的な成長プロセスを辿っていた．もっとも，最終的には全ての教員が成長していたことからも，参加動機等に拠らず，教員が成長していくためには基礎的な条件がある，ということを明らかにした．さらに，大学における研修では一定の条件を整備していくことで，体育の授業づくりや授業研究に対する関心や授業を実施する力量の形成に貢献し得ることを確認した．

結　章

本研究から得られた知見は，以下の4つであった．

1　研修の参加動機や契機の分析から，教員の多様な研修ニーズと参加意欲を明らかにした．また，それは3つのタイプに集約された．

2　研修を通じて教員は，直線的な成長プロセスと複線的な成長プロセスを辿ることが明らかとなった．また，教員が成長をしていくためには，迷いやジレンマに対応した研修内容，授業を追究できるコミュティの存在，時間的余裕といった環境的条件，客観的データを用いた授業分析における省察経験，といった点の大切さが明らかとなった．

3　研修を通じて教員は体育授業改善に向けたコミットメントを高めていった．このことから，一定の手続きや条件を整備していくことで，体育授業研究に動機付けられることを確認した．

4　教員のタイプと成長プロセスの関連が明らかになった．

本研究の特徴は，以下の３点に整理できる．

1　複数の現職教員に対するインタビューを実施し，体育科長期研修に対する多様なニーズや参加意欲があることや，研修過程の中で直線的な成長プロセスをたどる者と複線的な成長プロセスをたどる者がいることを明らかにしたこと．

2　研修ニーズや参加意欲と成長プロセスとの間には密接な関係があることを明らかにしたこと．

3　現職教員が体育授業改善への志向を高め，成長を遂げていくためには，基礎的な条件があり，大学側はこうした条件を整えていく必要性があると示唆したこと．

なお，本論文の内容や最終試験での質疑応答を踏まえて，本研究では学術的に価値ある課題を見いだし，

その課題を学術的に追究していることから，筆者は問題を見いだす能力や研究を論理的に展開する能力を獲得していると判断できた.

以上，審査の結果，本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められた.

《最終試験結果》

合格・ 不合格

令和3年1月26日